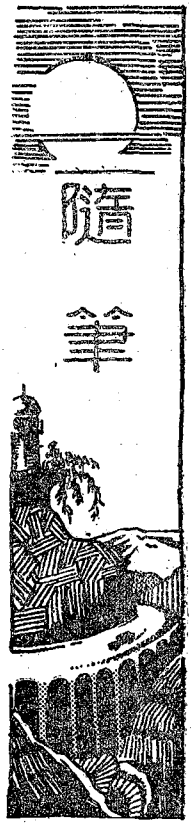

時事雜感

白洋漁夫

齋藤內閣の存續性

床次政友會顧問は其質問演說中に於し齋藤內閣を「スローモーション內閣」と稱したが、一面から觀察すると頗る當を得たる Nick name である。何事を爲すにも春の日の暮れなんとして今日もありとの感を懷かしむるのが齋藤內閣の特徵であるが、まさかに伽羅で作つた佛ではあるまい。しかし齋藤內閣の生命は其特徵の點に存するのであると思はる。第六十五回帝國議會に於ての首相の施政演說は亦其特徵に基くもので各省提出の事務報告を一括して代讀した寄木細工的演說だとの感がすると評したものがあるが頗る恰當な評言であると思ふ。演說中の外交に關する處では「新興滿洲國ノ發達ヲ促進シテ東洋ノ平和ヲ確保シ　…日滿共存共榮ノ實ヲ擧ゲツヽアルコトハ眞ニ同慶ノ至リニ堪ヘヤセヌ……又列國トノ交誼ハ愈〻敦厚ヲ加ヘテ何等渝ル所ナク……」と述べて居るに、豫算に關する處では「國際情勢ノ現狀ニ稽ヘ陸海軍ノ國防費ニ多額ノ增加ヲ必要トシ」と述べて居る。既に列國と敦厚なる交誼を結び何等渝ることなき國際狀態を維持しつゝあるのに何故の國防第一主義の豫算ぞ、吾曹深く怪訝に堪えない所である。若し夫れ「農山漁村ノ疲弊困憊ヲ匡救シ以テ其生活ノ安定ヲ圖ルコトハ政府ノ銳意努力シ來ツタ所デアリマスガ……」と述べて居るのに、九年度豫算は國防第一主義方針に出でた爲めに、內務省及農林省の要求である匡救

事業費を殆んど殘骸を止むるに過ぎぬものと爲したるは農漁山村の疲弊困憊は首相の所謂國民の自力更生の精神と相俟つて政府の施設が奏効して救濟されたものとの認識不足に陷つたものであらうか、資本主義的產業統制が尙强調せられ、眞の農業者をして昏迷に陷らしめた米穀統制策に絕大の期待を有ち我爲政家達の氣の付かぬ以前に於て英國に我國產品が輸出せられた如き民力の發暢は遙かに爲政家達の意圖の外に出て居るのである。而して今日の我國の政治の根本は客年三月の詔書におかせられて「文武互ニ其ノ職分ニ恪循シ衆庶各其ノ業務ニ激勵シ嚮フ所正ヲ履ミ行フ所中ヲ執リ協戮邁往以テ此ノ世局ニ處シ」と仰せられたる聖旨に副ひ奉ることであると述べて居るが、齋藤內閣は果して此の首相の言を實行し來たのか、其部下をして克く其旨を遂行せしめ來つたのか其答や如何、とにもかくに老廢とか無爲との批評を受けつゝも玆に現內閣の壽命の存するのは二大政黨の信用未だ恢復せず、而かも齋藤首相と高橋藏相と山本內相との三人が相倚り相謀り其多驗多識を發揮するが故である。如何に新物喰ひの日本人でも取つて以て代るべき何物もないなれば現狀維持に安ずる外はないのである。だが國難に處するの政策國策に關しては國民の呑氣性に狎れて其激勵努力を怠つてはならぬ、齋藤內閣存續は益々齋藤首相始め各大臣の責任重きを加ふる所以である。敢て閣臣の熟慮を庶幾ふものである。又、齋藤內閣下に於て政黨人の反省と軍部のある連中の自戒とは吾曹の欣快を感ずる所である齋藤首相は此點をも見逃してはならない所である。

軍人政治關與の是非

軍人の政治關與は吾曹絕對に反對である。「文武互ニ其ノ職分ニ格循シ」と詔りあらせ玉へるは抑も時弊の那邊に存するにあるかを靜思しなければならぬ重點である。此問題は獨り政黨人に取つて重大であるのみでなく、國民一體に取つて頗る重大性を帶びて居る。だが軍人夫れ自身に取つては最も重大であらねばならぬ。如何に忠誠愛國の熱情が多くは軍人に存在する國情であつ

ても人々其職分があり、規があり、埒があるのである。某論客が政黨人が自己の政治的無能、罪惡掩護の爲めの瞞着と反抗心に基く冷酷と卑怯とが軍人の政治關與を軍紀違反であると評するは共鳴し得ざる所であると論ずるは之れも一種の反政黨の意識に激した所に發した評言である。又林陸相が「現役の軍人がその國防と軍備といふ自己の任務から割出して純眞なる立場に於てその國事の一端政治の一端といふ事を研究し論議をすると云ふ場合に必ずしも絶對にないと申されぬと思ふ」と議院に於ける答辯は抽象的に何等の無理は見出されないが、一例を揭げて陸軍將校が其部下の兵の家鄕に於ける農村の狀態に就きて關心するは已むを得ないと云ふ意を述べられたが、夫れが此例示の限界線ならば不都合がないが、兵農合一を論じ、反政黨を主張し、國家の現狀に對し已むにやまれぬ發憤となつて結局國法無視の行動を執ると云ふが如き事にまで進んだものが假想せられた時には果して如何に陸相は思惟せらるゝか、結局は事實に於て非常の困難と苦心を感ぜらるゝのであらう。此の如き事實發生したりとするも尙現役軍人と雖も政治を研究し論議するは已み難き自然の勢であるが、實際行動はよくないと云ふのであるとの範圍內に止めしむることを得るや否、事の實際に在りては政務官職を有せざる軍人は須らく軍務に熱心從事すべくして妄に自己の判斷と認識とに立脚して政治に關與すべきものでない、其處に職分恪循の緊切なることが痛感せらるゝ。軍人の忠節、愛國の精神は自己の職分を嚴守し其埒內に於て熱情を逞しむるに於て軍人尊重の風習を馴致せしむるのである。

國民指導精神とは何か

歷史は繰り返すと言ふものの國家興亡の跡を繹ぬるときに全面的概況的には繰り返さるるのが人類社會の常事であるかに感ぜらるるが、仔細に考察すると必しも然らざるものである。例へば戰爭の如き屢〻繰返す人間社會の鬪爭史であるが、十字軍、魯佛戰爭、佛英戰爭、日露戰爭、世界戰爭に就いて見るも戰後に貽したる社會事象は決

して同一でないのである。元來人間社會は動搖已む時なく常に動搖を存續して居る、其處に人間社會の文化の進展が伴はるゝのである。動搖をして單に動搖に止まらしむることなく之れに進歩の結果をもたらさしむることの爲めに人間の努力を要し、又努力しなければならぬ所がある。斯くなければ人間社會は無意味である。而して動搖には必ず苦惱が伴ふのである、殊に飛躍更生の爲の動搖に最も大なる苦惱が伴ふのである。苦惱を征服することが喫緊事である。

往を彰かにして來を察す、と云ふことは勿論であるが、國史を詳かにして興國の由來を知悉し、建國創造の時代に遡つて其精神の依存する處を熟知することの重要なることは吾曹の認識敢て人後に落るものでないと自信する。されど徒らに舊に泥み、舊套に捕はれ、傳統のみに執着するに於ては、如何にしてか新興の氣運に乘し得べきか、新らしき酒は古き皮囊に入るべきものでない。人類社會は進化に進化を加へつゝある、舊態の如くして舊態そのものに止まらざるは日常吾曹の眼前に展開せられつゝある事象である。進化新興の勢は凝滯を許さない、一簣を以て江河を障へ得ざるは敢て言を費やすを俟たない處である。日に新に日に又新なるを要するは人類進歩の鐵則である。假令共產主義とフアツシズムとが現代の二大主義思想であると言ふも此極端な兩思想は少くと現代人類社會に於ては實行し得べきものでなく、幾億年後の遠き將來に於ては或は其完成せる思想の實行が見られ得るかも知れない。故に吾曹の歩み行くべきの思想は中庸でなければならない。去りとて捕捉し難く、說明し難く孟子の所謂浩然の氣の如く曰く言ひ難き主義精神では新興分子、進歩主義者、活氣の旺盛な青年者の滿足と認識とをゑられ得べきものでない。自然に歸れとか、神代時代の單純さに還元せよとか、環境に善處せよとか論しても亦同一である。建國の精神主義者も日本精神の唱導者も、神なからの道を說く者も此處に着意を怠つてはならないのは勿論、教育勅語の大精神の發暢に貢獻する處がなくてはならぬ。輕佻浮薄にも外來思に

想盲從するの非は敢て一言を要しないが設令右傾思想と言へども其處に愼重意を用ゆべきものがある。「嚮フ所正ヲ履ミ、行フ所中ヲ執リ」との綸言汗の如しである。爲政者も國民も治者も被治者も文官も武官も商工者も農民も夢寢にも忘れてはならぬ所である。此綸旨を拜して「擧國一心皆其ノ本務ニ勵精シ大ニ綱紀ヲ張リ嚴ニ荒怠ヲ戒メ固陋ノ偏見ニ囚ハレ矯激の思想ニ惑ハズ」との諭告を發したる內閣諸公は此諭告を啻に官報紙上の空文に終らしむることなきを期せられたい。矯激の思想の排すべきは勿論固陋の偏見亦世人を過に導くことを忘れてはならぬ。

（二、一記）

乘合自動車の進出振り

バスの壓倒的進出により國有鐵道は甚しい苦境に落入つゝあるが、これが對策を講ずるため鐵道省旅客課に於ては全國省線各驛に命じて昭和六年度中の國鐵旅客人員並に同收入につき省線と併行せるバスの進出による減少を調査した。それに依ると減少せる總旅客人員は五一、七四四、八六六人（總旅客人員の一割二分）、同收入は七、五六九、四一七圓（總旅客收入の四分）にしてバスの威力には驚かされる。それを距離別にすれば（一）五キロ未滿では減少人員は一八、三三〇、七二〇人（二割減）、同收入減は一、一二二、八二一圓（一割七分減）（二）十キロ未滿では減減）（三）二十少人員は一七、六七五人（一割六分減）同收入減は二、〇二〇、三九八圓（一割六分キロ未滿では、減少人員は一二、五〇六、三六八人（一割二分減）同收入減は二、四一八、二四六圓（一割二分減）（四）三十キロ未滿では減少人員は、二、一四九、九九〇人（六分減）同收入減は八四四、〇六八圓（七分減）（五）五十キロ未滿では減少人員は一、二八〇、三八三人（四分減）同收入減は八六三、一二三圓（五分減（六）六十キロ未滿では二二九、九〇〇人（一分減）同收入減は一九四、七七八圓（一分減）（七）八十キロ以上では減少人員七一、八七三人（歩合に達せず）同收入減は一〇五、九九三圓（歩合に達せず）にしてバスの短距離交通機關の雄であることが分る。